稲荷山鉄剣と教科書

高　橋　一　夫

要旨　稲荷山鉄剣の銘文は、空白の５世紀を埋めるものであった。その鉄剣は古代史を考える上で欠かすことができない貴重なものとして国宝に指定された。鉄剣銘文の解釈をめぐっていまなお活発に議論され、さまざまな説が提示されている。

現在、多くの教科書で稲荷山鉄剣が取り上げられている。稲荷山鉄剣は単に研究資料としてだけでなく、いまや小・中学校の社会、高校の歴史教育に欠かすことができない資料となっている。

本稿では、稲荷山鉄剣がいつ頃から教科書に取り上げられ、各段階でどのように扱われているかを統計的に示すことを目的にしている。また、研究の進展が教科書にどのように反映するかを知るとともに、今後の本館の研究活動や普及活動の参考にしようとするものである。

はじめに

さきたま風土記の丘とさきたま資料館には年間数多くの人びとが訪れ、1969年（昭和44）の開館以来の入館者数は８月２日に400万人を突破した。

このように多くの人びとが訪れる理由として、第一に全国的にもまれに100ｍ級の９基の古墳が群をなして存在すること、第二に稲荷山古墳から出土した国宝の「金錯銘鉄剣」が展示されていることがあげられる。つまり、古墳と遺物がともに存在し、あわせて見学できるのである。

もうひとつの大きな要因として、教科書に稲荷山古墳や金錯銘鉄剣が取り上げられていることが考えられる。そのために、社会科見学等で資料館に訪れる小・中学生が多く、過去９年間の全入館者数の内、多いときで46％、少ないときで31％であった。

そこで、小・中学校の社会と歴史の教科書に、また高校の日本史の教科書にどのように取り扱われているかを調べ、今後の館の運営や展示活動等の参考にしようとするものである。

1　稲荷山古墳と金錯銘鉄剣の歴史

埼玉古墳群はかつて旧埼玉村の入会地として、地元の人びとによってによって保存・管理されてきた。1937年（昭和12)、新設された学校の校庭埋立用の採取地として稲荷山古墳が選ばれ、古墳から学校までトロッコが敷設され、前方部の土が運び込まれた。古墳は昔から埋立用の土の採取地として、格好の目標になっていたのである。稲荷山古墳が後円部しか残っていないのは、こうした理由によるのである。

これを知った国は貴重な古墳が破壊されるということで国の史跡に仮指定し、翌1938年には古墳群全体が国指定史跡となったのである。

1966年（昭和41)、国は大規模な開発に対処して史跡等の保存を図るには、個々の史跡を保存するだけでは不十分であるという認識から、史跡等が集中し歴史的風土を残している地域については、

「風土記の丘」として広域に保存する事業を予算化した。埼玉県では翌 1967年に、さきたま風土記の丘建設事業費を予算化し、さきたま風土記の丘の整備に着手した。あわせて資料館建設も行うが、主体部が見学できる古墳が１基は必要だという観点から、古墳を１基発掘調査する計画が立てられた。そこで選ばれたのが、前方部が消滅していた稲荷山古墳であった。

稲荷山古墳の発掘調査は1968年（昭和43）８月に実施された。稲荷山古墳の破壊が契機となり国の指定史跡になってからちょうど30年後の夏であった。この時、他の副葬品とともに鉄剣が出土し、翌1969年10月に開館した資料館に展示された。しかし、錆が進み保存処理が必要となったため、奈良の元興寺文化財研究所に保存処理を依頼し、錆落としの段階で金象嵌の115文字が発見されたのである。世紀の大発見であった。この銘文が発見された1978年（昭和53）は、発掘から10年、古墳群が国指定史跡となって40年という節目の年でもあった。２年後の1980年（昭和55）には、金錯銘鉄剣のための新たな収蔵展示棟が開館し一般公開された。

そして、1981年（昭和56）には出土品は一括重要文化財に、1983年（昭和58）一括して国宝に指定された。

埼玉古墳群は毎年度、整備のための調査が行われ、個々の古墳の年代が明確になりつつある。しかし、全体の築造年代を把握しているわけではなく、隣接する丸墓山古墳との前後関係は正確には不明であるが、稲荷山古墳は埼玉古墳群で最初に築かれた古墳であると考えられている。

稲荷山古墳は築造後およそ1500年間もその雄姿をとどめていたが、1937年には前方部が削平された。しかし、このことが契機に埼玉古墳群は国指定史跡となるわけであるが、まさに稲荷山古墳はわが身を削って埼玉古墳群を守ったといっても過言ではない。その後、稲荷山古墳はさきたま風土記の丘の整備一環として発掘調査が行われ、銘文の発見へとつながっていくのである。金錯銘鉄剣は県民といや国民と資料館をつなぐ架け橋として、現在もなお多大な貢献をしているのである。

2　銘文の解釈

銘文の「辛亥年」は出土須恵器の年代から、471年が定説となるつつある。問題は鉄剣を造らせた乎獲居臣が果たして古墳の被葬者か否か、あるいは北武蔵の豪族か否かという点である。遺物は遺跡と相違して、人の手により移動することができるので問題を複雑にしている。これまでに、乎獲居臣をめぐってさまざまな見解が打ち出されているが、大雑把にまとめると次のようになる。

◎在地豪族説

乎獲居臣は杖刀人の首として大和の斯鬼宮に奉事した記念に金象嵌の鉄剣を造らせ銘文を刻ませた。それを持ち帰り、死後、鉄剣が礫槨に副葬された。

◎畿内豪族説

大和の王権の中枢にいた乎獲居臣が杖刀人の首としての自らの功績を記念して鉄剣に銘文を刻ませた。その後、北武蔵の地に派遣され、稲荷山古墳に埋葬された。

◎畿内豪族鉄剣下賜説

杖刀人の首である畿内豪族の乎獲居臣が、部下の東国出身の杖刀人に鉄剣を下賜した。

以上３説はいずれも有力な学説で、どの学説を採用するかによって稲荷山古墳の評価は変わってくるが、稲荷山古墳から金錯銘鉄剣が出土したことはまぎれもない事実である。次に金錯銘鉄剣が小・中・高の教科書でどのように扱われているかをみていこう。

3　小学社会と金錯銘鉄剣

小学校社会の教科書に金錯銘鉄剣が掲載されるのは1986年度版（昭和61）からである。調査対象とした教科書数は図の凡例で「全体」と記されている数である。

なお、調査対象とした教科書は埼玉県立南教育センターと東書文庫が保有しているものだけに限られていることをあらかじめお断りしておく。

（1）本文での扱われ方

教科書本文で稲荷山鉄剣について記されている教科書数は第１図のとおりである。

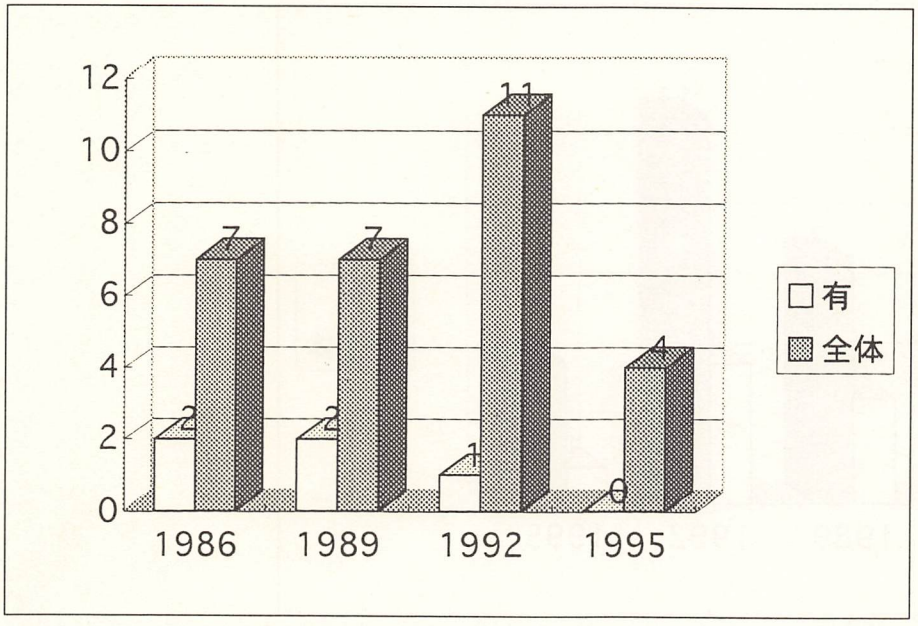
教科書本文は次のように記載されている。

A、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳から発見された鉄剣には、この地方の王が大和朝廷につかえていたことが記されています。」

B、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳で発見された鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめていたという文字がきざまれていました。熊本県の江田船山古墳で見つかった鉄剣に記された大王の名も、ワカタケルだと考えられています。」

C、1989年度「埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめるのを助けた、という意味の文字がきざまれていました。オワケはこの鉄剣をつくらせた人で、ワカタケル大王は雄略天皇だと考えられています。」

D、1992年度「埼玉県にある稲荷山古墳から出土した鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめるのを助けた、という意味の文字がきざまれていました。ワカタケルは、雄略天皇だと考えられています。また、オワケはこの剣をつくらせた人のようです。」



第１図　小学社会・本文での記載数

Aのみが鉄剣の銘文に「この地方の王が大和朝廷につかえていた」との歴史的評価を下しており、B・C・Dは銘文の内容をそのまま記している。

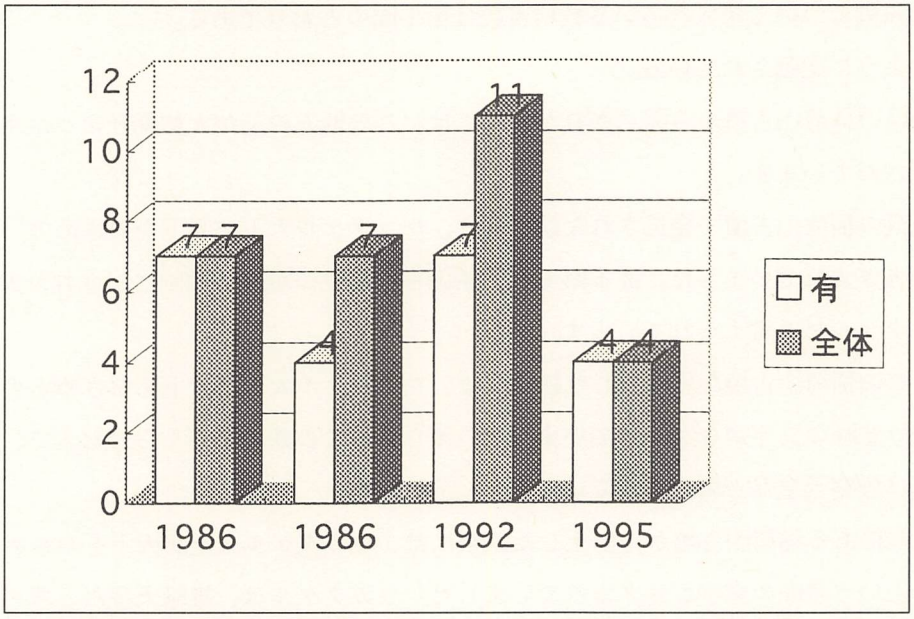
（2）鉄剣写真の掲載

鉄剣の写真が掲載されている教科書数は第2図のとおりである。高い割合で鉄剣の写真が掲載されているようすがわかる。

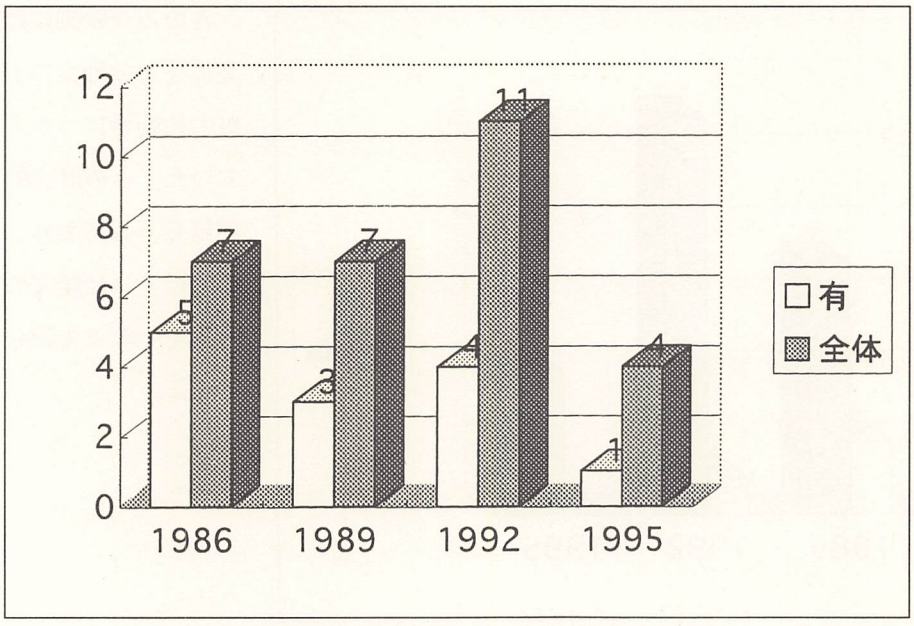
（3）鉄剣に関する説明

鉄剣の写真に何らかの説明を加えている教科書は第3図のとおりである。主なものを紹介しよう。

A、1986・1992年度「埼玉県行行田市の稲荷山古墳から出た鉄剣には、次のような意味の文字がきざまれています。『わたしは、オホヒコの子孫のオワケである。代々、武人のかしらとして大王を守ってきた。それを記念して、この剣をつくった。』この文字から、五、六世紀ごろの大和国家と、この地方の豪族の関係がつかめそうです。」



第2図　小学社会・鉄剣写真掲載数



第3図　小学社会・鉄剣資料説明数

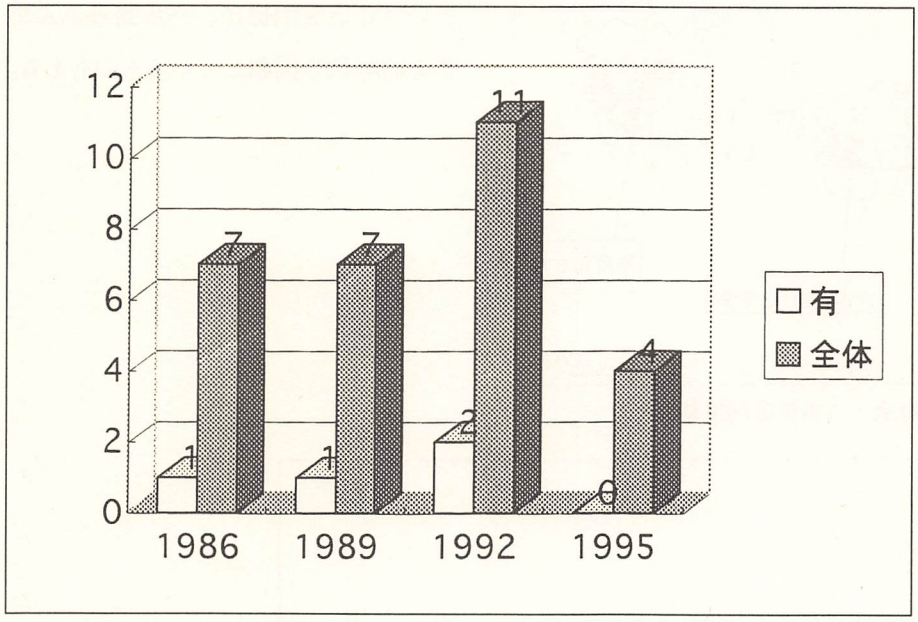
B、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳から発掘された鉄剣には、115の文字のがほりこまれていて、この地方の豪族が大王を助けてきたという意味のことが記されています。」

C、1986年度「使われ始めたころの漢字『埼玉県の稲荷山古墳で発見された鉄剣にきざまれた漢字』

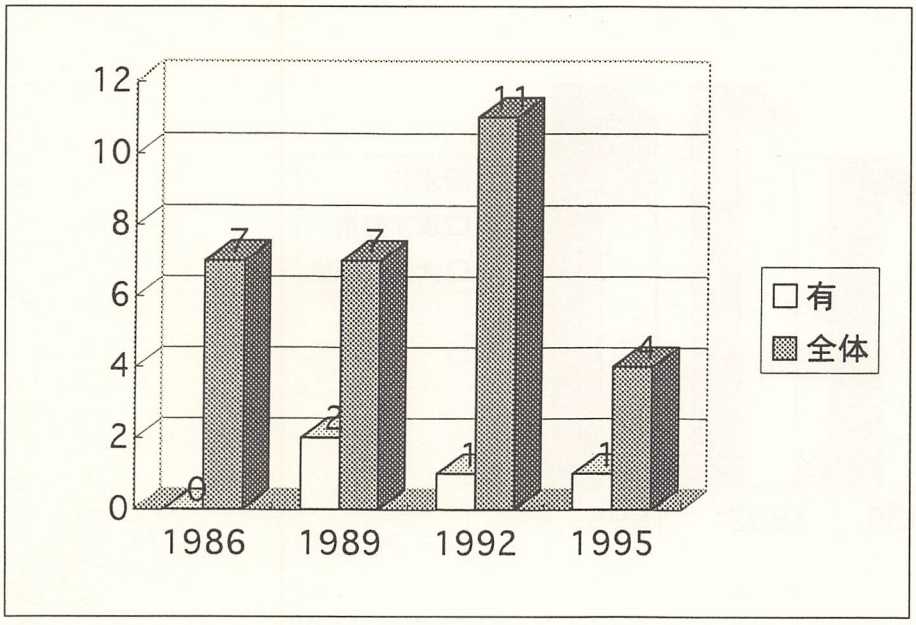
D、1989年度「埼玉県行田市の稲荷山古墳で発見された鉄剣にきざまれていた文字。ワカタケル大王と読める。」

E、1992年度「漢字が使われ始めたころのものです。(埼玉県)」

F、1995年度「わたしは、この鉄剣をつくらせた豪族のオワケである。わたしの家は、大王を守る軍隊の隊長を代々つとめ、わたしはワカタケル大王（雄略天皇）につかえていた。大和朝廷と埼玉県にいた豪族とのつながりが分かります。」



第４図　小学社会・古墳写真掲載数

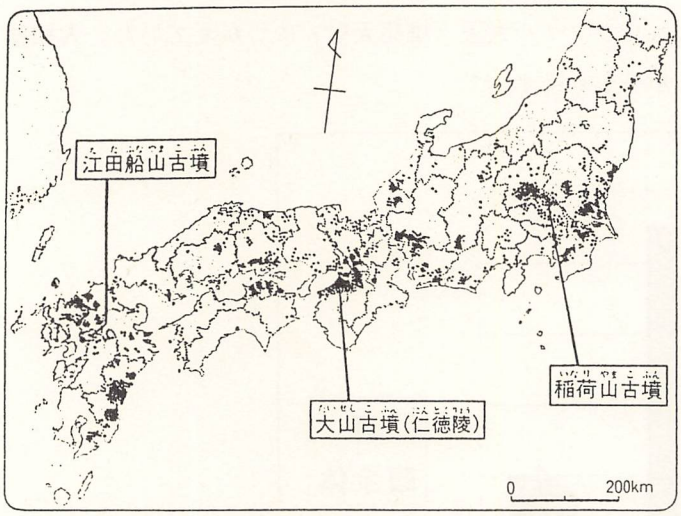


第５図　小学社会・古墳位置図掲載数

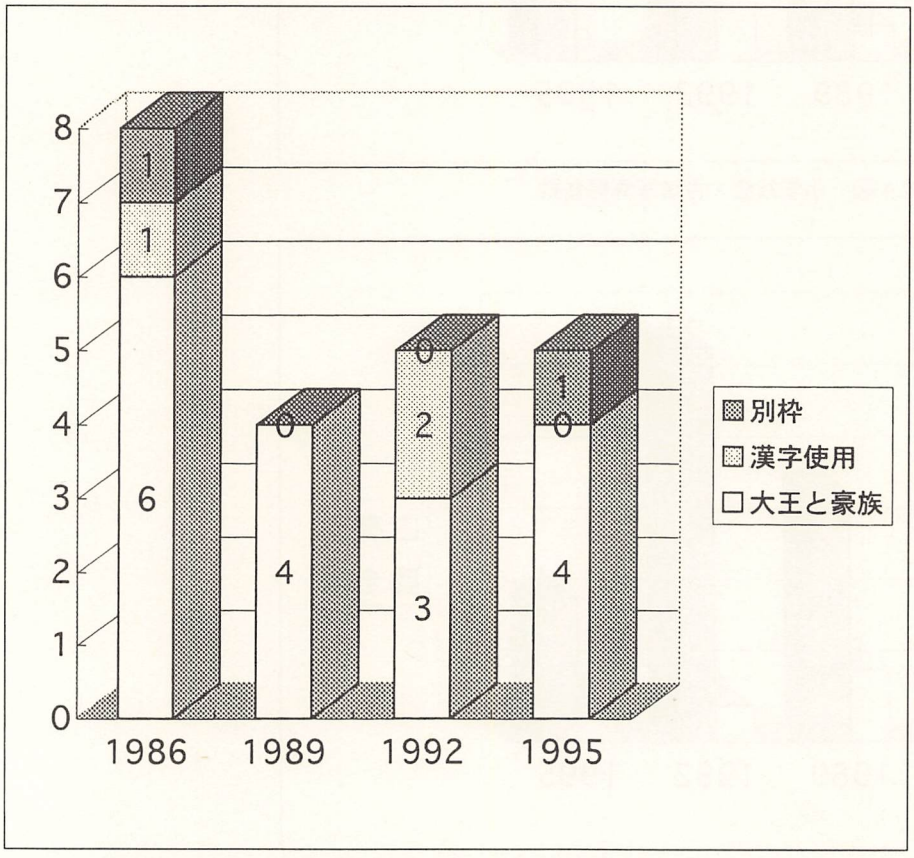
G、1995年度「現在の埼玉県の古墳から出土したもので、大王の役人としてつかえたことが書かれています。」

H、1995年度「埼玉県にある稲荷山古墳から、鉄剣が発掘されました。それには115文字が金でしるされていました。剣は、5世紀の終わりごろのものといわれています。『わたしは、ワカタケル大王のおられる宮廷におつかえして、大王が天下を治めるのを助けた」という意味のことが書かれています。ワカタケル大王は、雄略天皇だと考えられています。ワカタケル大王の時代には、各地の豪族たちが大和に出向いて、大王につかえる政治のしくみができあがっていたようです。」

多くの教科書は銘文の内容をそのまま記しているが、乎獲居臣は在地豪族ということを前提に、一歩踏み込んで歴史的解釈を掲載しているものもある。



第6図　小学社会・古墳位置図掲載例



第7図　小学社会・取り扱われ方

（4）稲荷山古墳写真の掲載

鉄剣とともに稲荷山古墳の写真を掲載しているのは第4図のとおりである。1989年度版の教科書は稲荷山古墳を表紙に採用している。

（5）稲荷山古墳の位置図掲載

稲荷山古墳の位置が地図上に位置が示されているのは第5図のとおりである。掲載方法は全国の前方後円墳の分布や、主要古墳の分布図のなかに、大阪府仁徳陵（大仙古墳）、熊本県江田船山古墳、兵庫県五色塚古墳とともに稲荷山古墳の位置が表示されている（第6図）。

（6）取り扱われ方

最後に、鉄剣がどのような個所で扱われているかを調べてみると第7図となる。

小学校段階では東アジアとの関係を記述することはないので、倭王武との関係で記載されることはない。最も多いのが大王と地方豪族との関係の資料として扱われている例が多いことがわかる。また、最古の漢字使用例として扱われる例もある。さらに、別枠を設けて詳細に解説している場合もある。

参　考

小学校学習指導要領　社会　平成元年3月

1　目標

（1）　国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について関心と理解を深めるようにし、我が国の歴史や伝統を大切にする心情を育てる。

2　内容

（1）　我が国の歴史は、大和朝廷による国土統一が行われてから、政治の中心地や世の中の様子などによって幾つかの時期に分けられることに気付き、それぞれの時代の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に理解できるようにするとともに、我が国の歴史や先人の働きについて関心を深めるようにする。

ア　身近な地域や国土に残っている遺跡や文化財などを調べて、自分たちの生活の歴史的背景に関心をもつとともに、我が国の歴史を学ぶ意味について考えること。

イ　遺跡や遺物などを調べて、農耕が始まると人々の生活や社会の様子が変わったことや、大和朝廷による国土の統一の様子について理解すること。その際、神話・伝承を調べて、国の形成に関する考え方などに関心をもつこと。

小学校指導書　社会編　平成元年6月

大和朝廷による国土統一の様子については、古墳やその出土品などを調べて、具体的に理解させることが考えられる。

4　中学歴史と稲荷山鉄剣

鉄剣が中学歴史の教科書に登場するのは1981年度版からで、銘文が発見されてから2年後である。小学校社会では本文中に鉄剣の記載がみられたが、中学校歴史では本文中の記載は一切みられない。

（1）　鉄剣写真の掲載

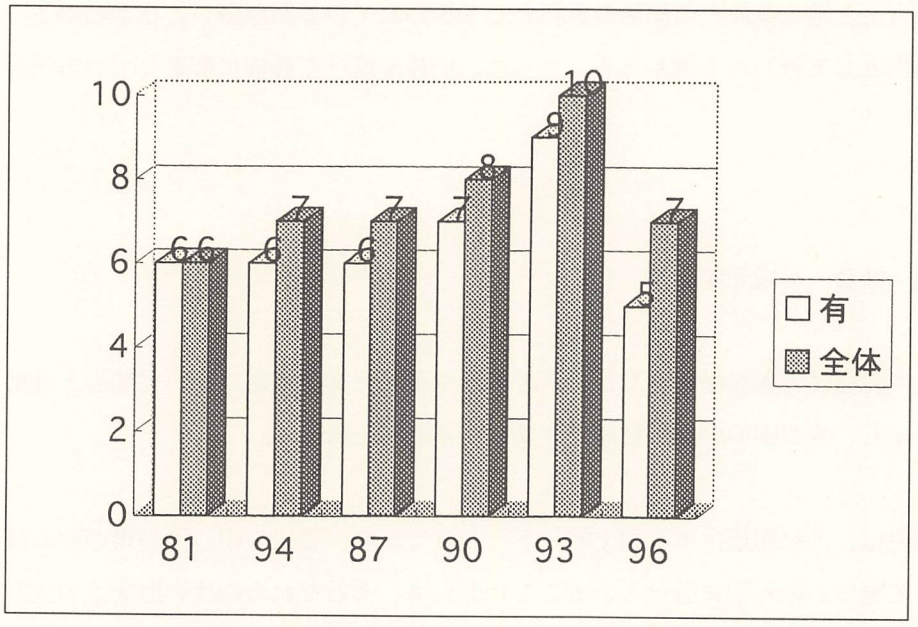
鉄剣の写真が掲載されている教科書数は第８図のとおりである。大半の教科書に写真が掲載されているようすがわかる。なお、181年度版の以前の教科書をみると、鉄剣の代わりに和歌山県隅田八幡神社に伝わる銅鏡が、漢字で日本語を表記した最古の使用例と掲載されている。

（2）製作年代

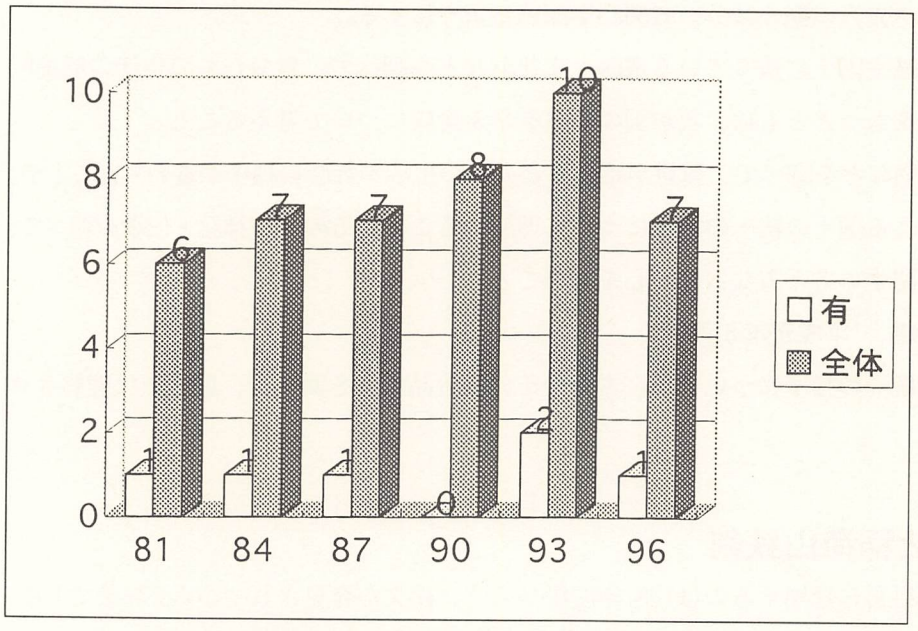
小学校の社会ではみられなかったが、中学校歴史では鉄剣銘文の最初に書かれている「辛亥年」について、資料説明のなかで触れている（第９図）。年代については1981・1984年度版は「471年か531年」、1987年度版以降は「471年が有力」となっており、辛亥年＝471年説が定着しつつある。

（3）鉄剣に関する説明

鉄剣についての説明は、写真同様多くの教科書で行われている（第10図）。ここでその主なものをみていこう。



第８図　中学歴史・鉄剣写真掲載数



第９図　中学歴史・製作年代記載数

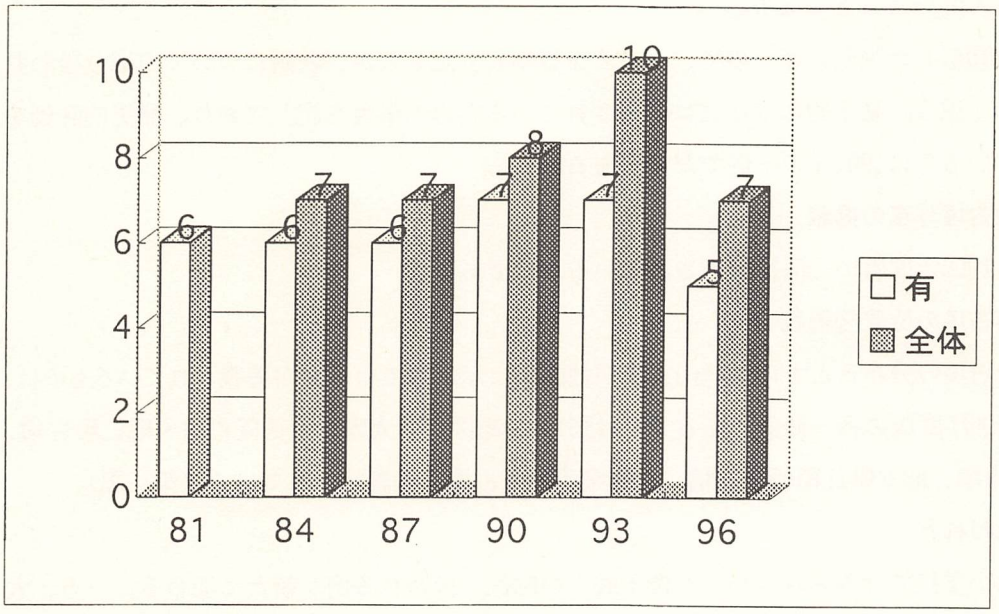
A、1981年度「この文字をどう読むかが学問上重要な問題になっている。」

B、1981年度「大王の名と考えられる文字などがある。漢字で日本語をあらわしたもっとも早い時期の5世紀か6世紀はじめごろのものといわれている。」

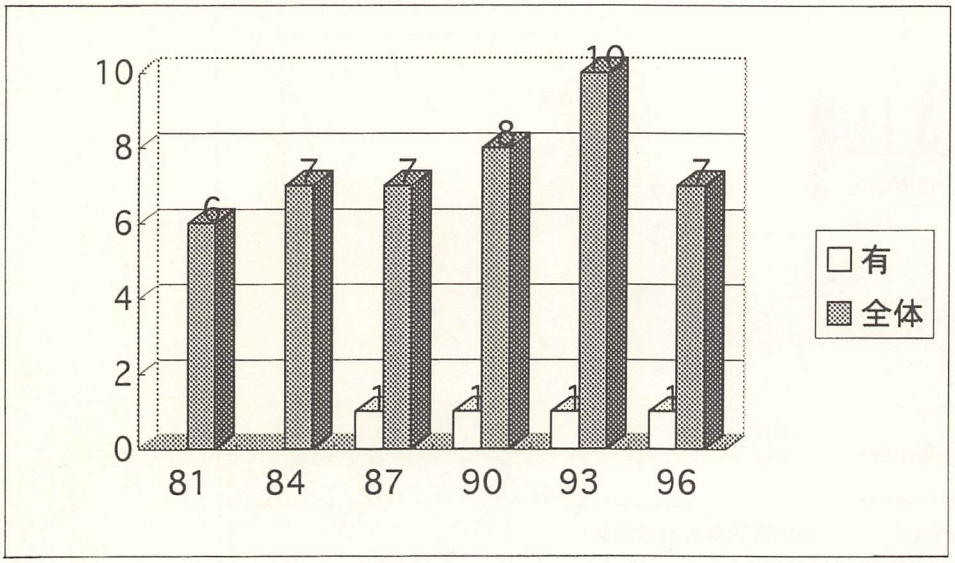
C、1981年度「471年か531年のいずれかに書かれたものといわれ、乎獲居臣とその7人の先祖の名がしるされている。」

D、1981年度「この鉄剣にみえる獲加多支鹵（ワカタケル）大王が倭王武にあたると考えられている。」

E、1984年度「金文字の文の最初に、『辛亥年七月中』に書かれたと記されており、その年は471年か531年をさすと考えられる」。「現在、日本で出土しているもののなかでは最古の文字とおもわれ、ひじょうに貴重なものである。金文字をきざませた人は『乎獲居』という名で、



第10図　中学歴史・鉄剣資料説明数



第11図　中学歴史・古墳位置図掲載数

その祖先７人の名も書かれている。なかでも『意富比垝』いう人については、初代という意味の『かみつおや』という漢字であらわしている。このように漢字の音と訓をたくみに使って日本語の話し言葉を文字にうつしかえていったのである」。（別枠「鉄剣に115の金文字」の概要　埼玉古墳群の図も掲載）

F、1987年度「1978年（昭和53年）、剣身から115文字が発見された。そこには、この鉄剣をつくらせたのはオワケで、ワカタケル大王（雄略天皇と考えられる）が、天下を治めたのを助けたことなどが記されていた。鉄剣の製作は、471年といわれている。」

G、1993「1978年（昭和53年）、埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣から、金ではめこまれた銘文が発見され、そのなかの「辛亥年」は471年、「獲加多支鹵大王」は雄略天皇とされ、船山古墳出土の大刀銘についても、「治天下獲□□□鹵大王世」と読むべきだとする説が強まった。とすれば、５世紀後半には大和政権の支配が少なくとも西は現在の熊本県から、東は埼玉県までおよんでいたことになる。」

各年度版には類似した説明が多いので、それらを省略して記したが、鉄剣についての取り扱われ方はわかるものと思う。基本的には銘文に記載されている内容の事実を記しており、歴史的評価をあわせて記しているのは1993年の一例でだけである。

（４）稲荷山古墳写真の掲載

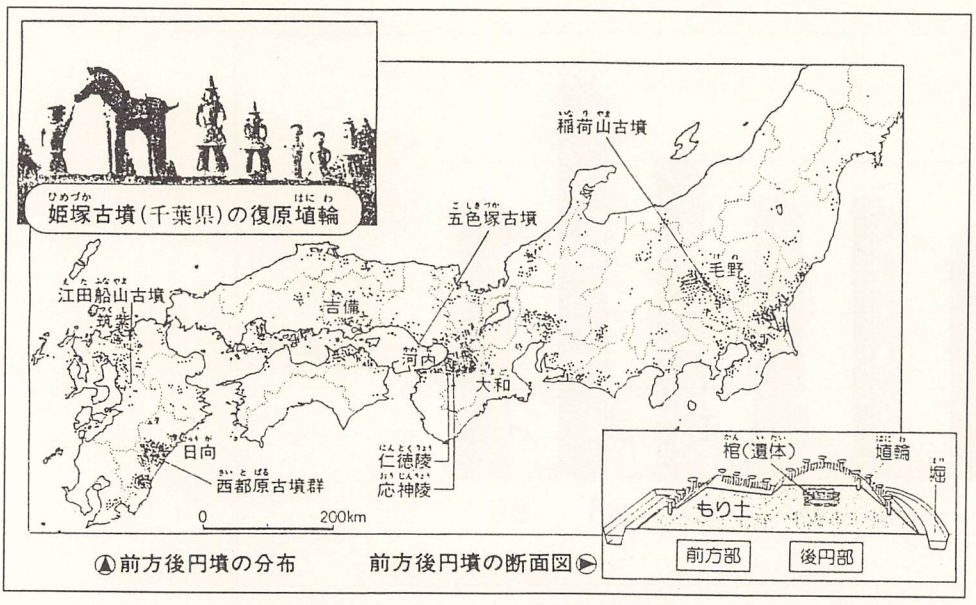
写真の掲載は1990年度版の一冊に掲載されているだけである。

（５）稲荷山古墳の位置図掲載

全国の前方後円墳の分布とともに稲荷山古墳が地図上に示されている図が掲載されているものは、1984年度から1996年度版に各一冊ずつある（第11図）。分布図には大阪府仁徳陵古墳・応仁陵古墳、兵庫県五色塚古墳、熊本県江田船山古墳、宮崎県西都原古墳群も表示されている（第12図）。

（６）取り扱われ方

中学歴史では小学校ではみられなかった倭王武との関係で扱われる例が新たに加わる。一方、大



第12図　中学歴史・古墳位置図掲載例

王と地方豪族との関わりでの扱われ方は小学社会と比較してもその数は減少している。1996年度版ではゼロというのも興味深い減少である。各学説があり評価が定まっていないことが大きな要因と推察される。また、一方では漢字を使用しての最古の日本語表記例としての解説が増加している。これは事実として認定できるのでからであろう。別枠を設けて詳細に解説を加えている例が1981・1984年度版にはみられたが、それ以降はみられない（第13図）。

参　考

中核校学習指導要綱　歴史的分野　平成元年３月

1　目標

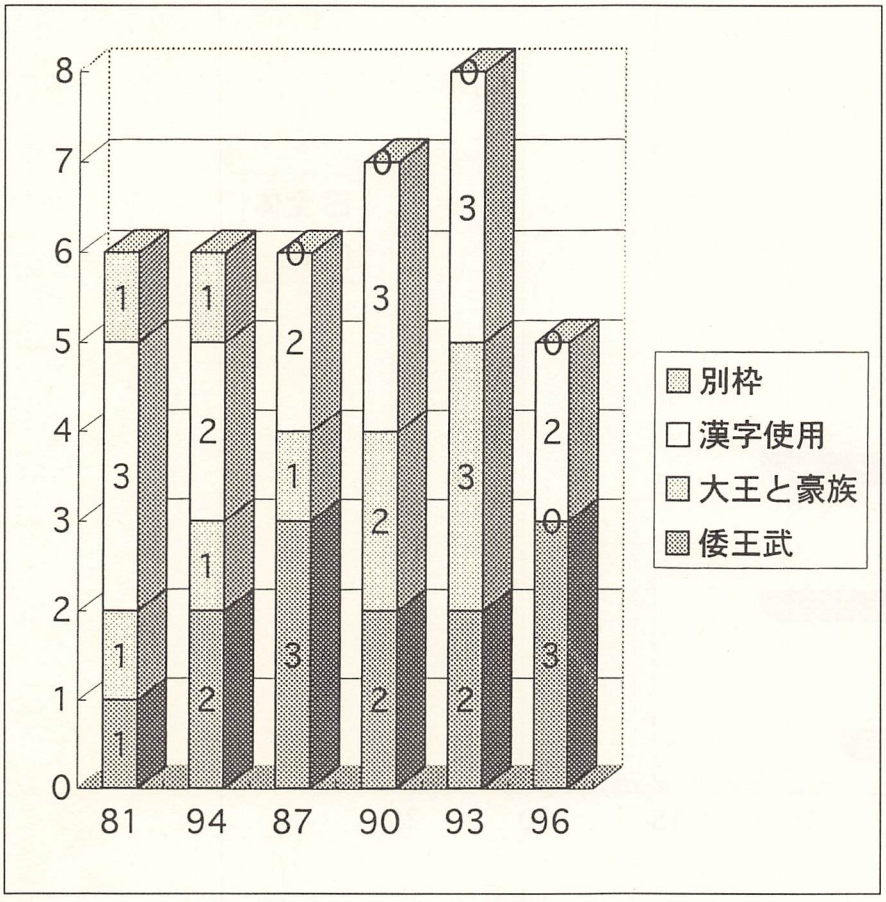
（1）　我が国の歴史を、世界の歴史を背景に理解させ、それを通して我が国の文化と伝統の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、国民としての自覚を育てる。

（2）・（3）略

（4）　歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに、他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う。

2　内容

（2）国の統一が進み、大陸の文物・制度を積極的に取り入れて古代国家が形成されたことを、当時のアジアの動きと関連させながら理解させるとともに、仏教文化が栄えたことや当時の



第13図　中学歴史・取り扱われ方

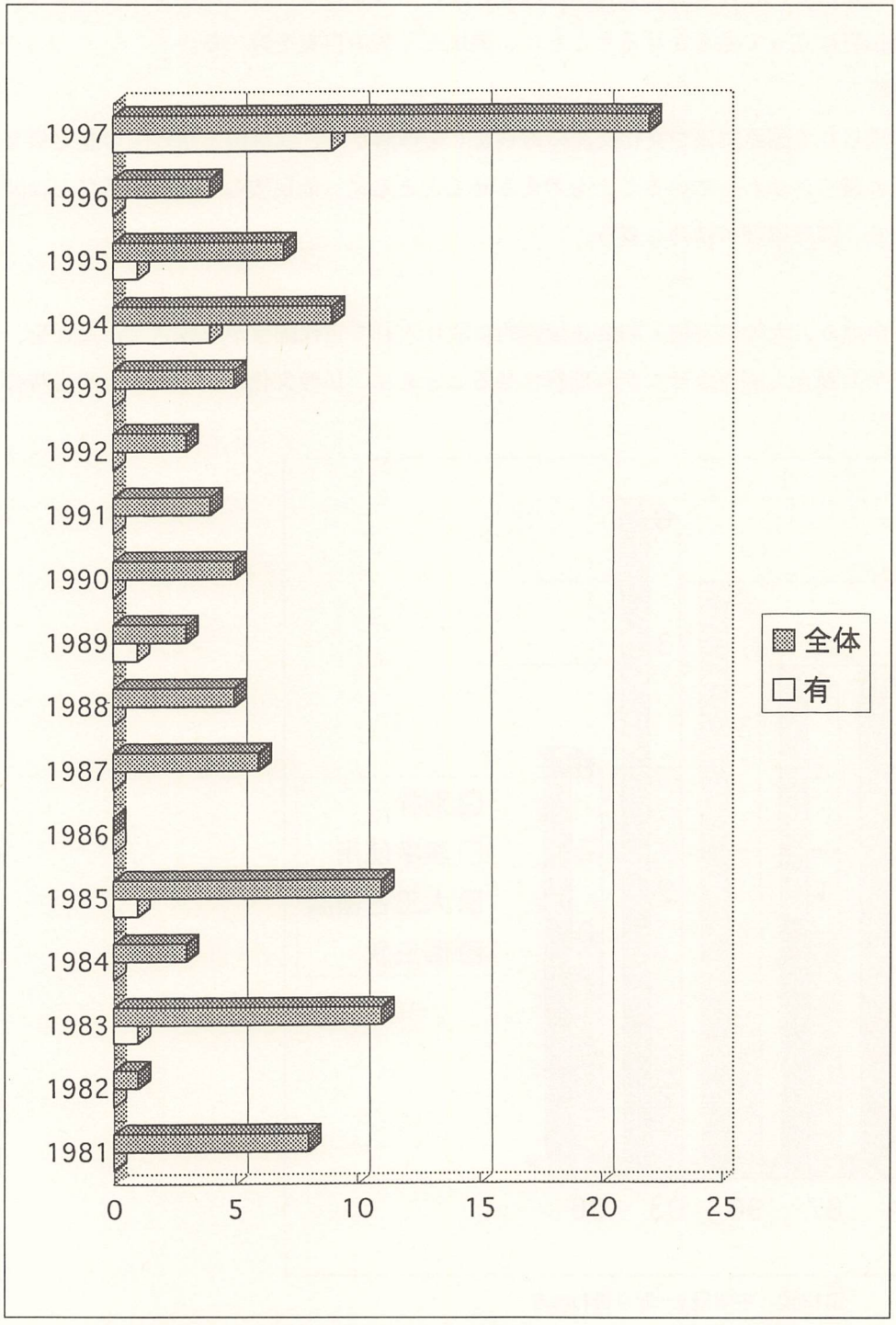
文化に見られる国際的な要素に着目させる。(以下、略)

ア　国の成り立ちと東アジアの動き

古墳文化と大和朝廷による国の統一を扱い、国家の形成過程を理解させるとともに、当時の人々の信仰、中国や朝鮮の情勢、大陸から移住してきた人々が日本社会の発展に果たした役割に着目させる。

中学校指導書　社会編　平成元年７月

ここでは、古墳文化と大和朝廷による国の統一と東アジアの動きを背景に学習して、我が国における国家の形成過程を理解させるのがねらいである。



第14図　高校日本史・本文での記載数

「古墳文化」については、その分布や形状、出土品に見られる特色から当時の社会の生活の様子を知るとともに、国の統一の過程を考えさせる手がかりともする。

「大和朝廷による国の統一」については、小国家の形成から大和朝廷による国の統一までの大筋をつかませる。(略)

「中国や朝鮮の情勢」のあらましと、「大陸から移住してきた人々が日本社会の発展に果たした役割」については、彼らがもたらした文物、例えば漢字や仏教、土木・冶金などの技術が、どのように我が国の発展と関連をもったかに着目させるようにすることが大切である。

5　高校日本史と金錯銘鉄剣

高校日本史に鉄剣が登場するのは、中学社会と同じ19981年度からである。鉄剣が登場する以前は、隅田八幡神社所蔵鏡の銘文が日本最古の文字として取り上げられていたが、鉄剣登場後もあわせて紹介されている。

（1）本文への記載

1983年度以降、毎年度ではないが本文の記載が散見される(（第14図)。それをここに紹介しよう。

A、1983年度「古墳から出土する刀剣の銘文によれば、強大となった大和政権の王は、みずから大王と称し、5世紀の後半には関東地方や九州中部の首長をも従えたと推定される」。

B、1994年度「埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣や熊本県江田船山古墳出土の鉄刀には、ともに『獲加多支鹵大王』の名がみえる。これは倭王武にあたる雄略天皇をさすと考えられ、5世紀後半には大王の支配権が九州から東国までおよんでいたことがわかる。」

C、1994年度「埼玉県稲荷山古墳の鉄剣などに見られる銘文は、5世紀後半頃、すでに和音にあわせて、漢字を使いこなせるようになっていたことを示している。」

D、1994年度「5世紀後半ころには、埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳から出土した鉄剣・大刀の銘文に「獲加多支鹵大王」というように大王号がみえており、大王家が他を圧倒する地位を得ていたことがわかる。」

E、1995年度「倭王武がのちに雄略天皇とよばれたワカタケル大王である可能性は高い。埼玉県稲荷山古墳と熊本県江田船山古墳から、この大王に仕えた豪族のことが銘文として刻まれた鉄剣と大刀が発見されたており、ワカタケル大王の時代に大和政権の勢力圏が関東地方と中部九州にまで及んだことを推定させる。」

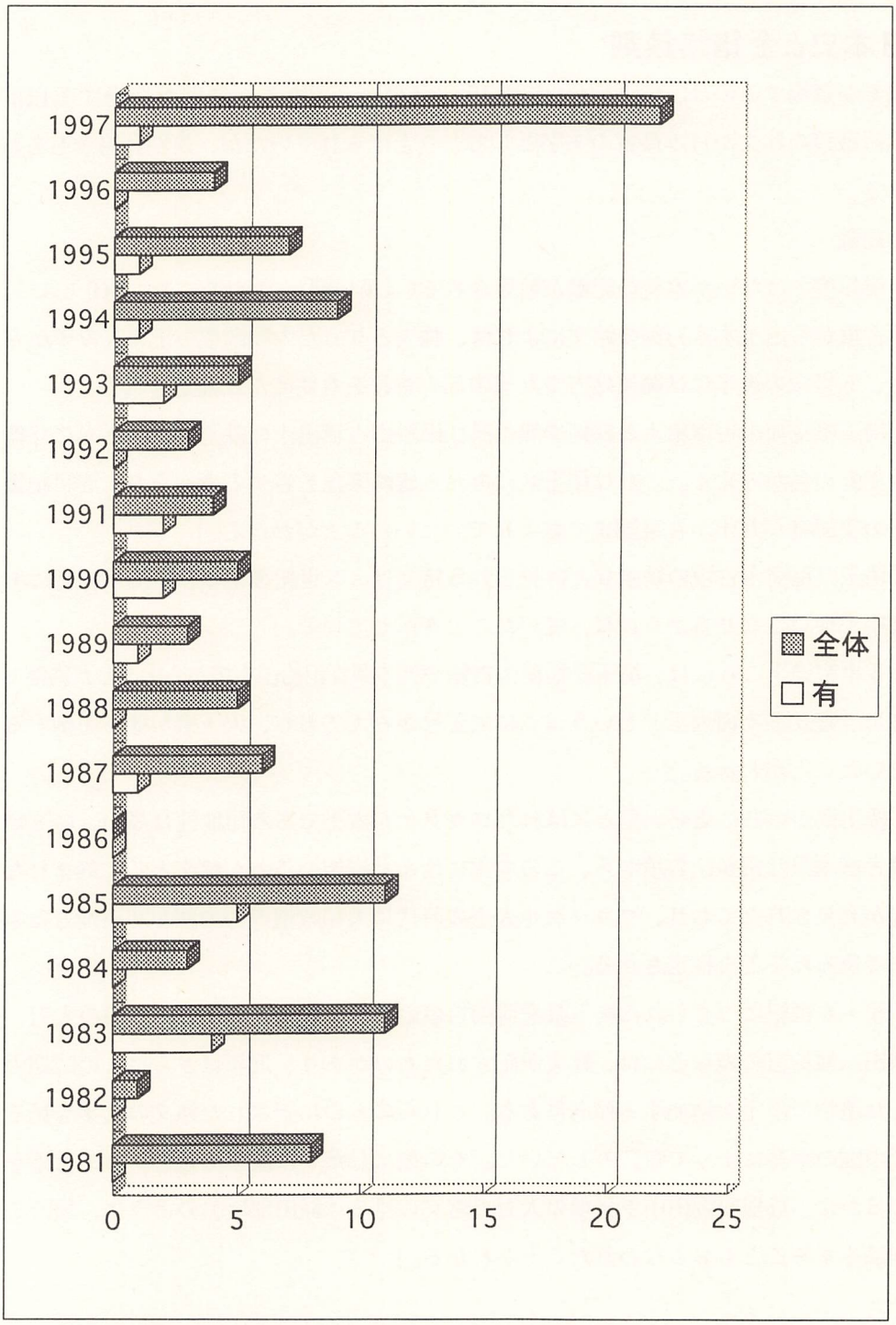
F、1997年度「5・6世紀につくられた埼玉県稲荷山古墳の鉄剣、熊本県江田船山古墳の大刀、和歌山県隅田八幡神宮の鏡などには、銘文が記されたものがあり、近年はさらにこの時期の文字を記した遺物の出土が増加する傾向にある。これらのものに記された銘文の文字を見ると、当初は中国の字音によって音読みしていた。その後はしだいに漢字で音をかりて言葉をしたもののほかに、島根県岡田山1号墳の大刀の銘文に見る「額田部臣」のように、額田をヌカタと訓読みすることもおこなわれたことがわかる。」

1997年度版は本文に記されている件数は９件と高い数値をしめしているが、それ以前の内容が重複している例が多いので省いた。

記載内容は鉄剣銘文に歴史的評価をし、在地豪族説を採用し、大和政権の支配範囲の拡大示す資料として扱うものと、最古の日本語の資料として扱う二者に鮮明に分かれる。

（２）本文注の内容

高校日本史では小・中ではみられなかった注が設けられている（第15図）。その内容についてみ



第15図　高校日本史・本文注の記載数

てみよう。

A、1983年度「埼玉県行田市の稲荷山古墳の鉄剣銘に『獲加多支鹵大王』とあり、熊本県菊水町江田船山古墳の大刀銘に治天下獲□□□鹵大王世……」とあるのは、倭王武にあたる雄略天皇をさすので、これらの古墳にほうむられた人びとが、大和政権と密接な関係をもっていたことがわかる。」

B、1983年度「埼玉県稲荷山古墳から出土した鉄剣は471年につくられたと考えられ、この鉄剣をつくった東国の豪族は獲加多支鹵（ワカタケル）大王の宮に仕えていたと推定される。なお、熊本県江田船山古墳から出土した鉄刀の銘にみえる『獲□□□鹵大王』も同じワカタケル大王と考えられ、このころ大和王権が東国から九州にいたる小国の首長をしたがえていたことが推定される。」

C、1983年度「埼玉県行田市の埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土の鉄剣銘に「獲加多支鹵大王」（雄略天皇・倭王武か）とあるのは、大和政権の勢力がすでに関東にまでおよんでいたことを推測される。」

D、1983年度「漢字使用のもっとも古い例として、熊本県江田船山古墳出土の大刀、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣、和歌山県隅田八幡神社蔵の銅鏡などの銘文がある。稲荷山鉄剣にきざまれた115文字の金象嵌の銘文中、『辛亥年』を471年とし、『獲加多支鹵大王』をワカタケルノオオキミと読んで雄略天皇にあてる説が有力である。」

E、1985年度「熊本県玉名郡菊水町の江田船山古墳出土の大刀銘には『治天下獲□□□鹵大王世…』とあり、埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣銘にも『獲加多支鹵大王』とある。『大王』は、倭五王の１人武、記紀（『古事記』『日本書紀』）ワカタケルの名で記録された雄略天皇をさすと考えられる。これらの大刀や鉄剣をもつ古墳の被葬者は、大和政権と密接な関係にあったと推測される。」

F、1993年度「和歌山県の隅田八幡神社に伝わった人物画像鏡には、大王の称があり、また、埼玉県の稲荷山古墳や熊本県の江田船山古墳から出土した刀剣の銘文から、５～６世紀ごろ、地方の首長が特定の職務をおびて大和王権に仕えたようすがうかがわれる。」

これ以降は各出版社ともほぼ同じ内容の注を掲載している。また、注では大和政権と地方豪族との関係での解説が多く、「密接な関係」、「したがえていた」、「勢力がおよんでいた」、「特定の職務をおびて大和王権に仕えていた」など、より歴史的評価をしている点が特徴である。

（３）別枠の内容

本文中に別枠を設けてさらに詳細に解説をしている教科書は13件存在する。しかし、同一出版社による数年度にわたる同一内容の掲載もあるので、実質的には６件ということができる。その内容の概略を紹介しよう。

主題学習－漢字使用最古の遺品　隅田八幡神社の鏡と江田船山古墳出土の大刀が漢字使用の最古の例であり、大刀銘文の冒頭部分をタジヒノミヤニミズハノオオキミと読み、反正天皇と推定していたが、稲荷山古墳から出土した銘文には「辛亥年」471年、「獲加多支鹵大王」と記されていることから、江田船山古墳の大刀銘も「獲加多支鹵大王」と読むべきだとする説が強まった。「とすれ

ば、漢字使用の最古の遺品がいま一つふえるとともに、5世紀後半には大和政権の支配が、少なくとも西は熊本県から東は埼玉県にまでおよんでいたことになる。」とある。

古代史の再発見　1ページを割いて詳細に解説している。その内容は以下のとおりである。

1、わが国形成される過程は記紀などに記されているが、記述に史実性を認めるには裏付けが必要なこと。

2、金石文や木簡のなどの新発見は、記紀の史実性が確認されたり、従来まったく知られなかった新知識をもたらしてくれる。

3、発見の経緯

4、銘文の内容　①115文字は飛鳥時代以前の金石文中最大であること、②辛亥年（471）の年が紀があること、③孝元天皇の皇子と推定である大彦命と思われる「意富比垝」の名がみえること、④倭王武すなわち雄略天皇と推定される「獲加多支卤大王」の名が記されていること。

5、③については異論も少なくなく、大彦命は崇神天皇のときに四道将軍の一人として北陸に派遣されたと伝えられているが、この伝承が稲荷山鉄剣銘によって史実であると証明されたとする説と、それを認めない説とがある。しかし、記紀編纂より二百数十年前、すでに関東の人々が、「意富比垝」なる指導者を自分たちの先祖だと信じていたことは確かであること。

6、稲荷山鉄剣の発見により、江田船山古墳の大刀銘も「獲加多支卤大王」と読みなおして雄略天皇にあてることができ、雄略天皇の勢力が東は武蔵、西は肥後におよんでいたことが裏付けられ、倭王武の上表文からもその勢力がひろくおよんでいたと考えられるようになった。

7、稲荷山古墳出土の鉄剣銘は古代史の再発見に重要な手がかりをあたえてくれた。

テーマ学習　115文字の発見　1ページを割いて解説している。その内容は、①稲荷山古墳と副葬品の概要、鉄剣の形状、②発見の経緯、③銘文の概略、ただ、雄略天皇は斯鬼宮にいた記録がないことなどから、これを疑問視する説もあること、④これまでに発見された金石文は、いずれも西日本で発見されもので、東日本でははじめてで、かつこれまでに発見されたもののどれよりも長く、内容が豊富であり、史料の乏しい東日本の古代史を研究するうえで、重要な史料として注目される。

ワカタケル大王の時代　①副葬品の概要と副葬品から馬に乗る武人が想定される、②発見の経緯、③銘文の概略、④この鉄剣の銘文が解読されたことにより、江田船山古墳の大刀銘文の大王もワカタケル大王と解読された、⑤こうしたことから、東国と九州の豪族がワカタケル大王に仕えていたことが明らかになり、大王が東は東国、西は九州中部にいたる広い範囲を支配していたことが推定される。

鉄剣は語る　①発見の経緯、②銘文の概要、③この鉄剣の銘文の発見により、江田船山古墳大刀の王名も「獲加多支卤大王」とよめるようになった、④こうしたことから5～6世紀には大和王権が、東国から九州の豪族を支配していた事実が明らかになった。

銘文の語る歴史－115文字の大発見　①6世紀以前の金石文の紹介、②銘文の概要、③1987年発見の千葉県市原市稲荷台1号墳出土の「王賜」銘鉄剣は、稲荷山鉄剣より古い5世紀中ごろ以前で、「王」を畿内の倭王とみるか、東国の有力首長とみるかの見解は分かれているが、5世紀ころの東国を研究する貴重な資料となった。④稲荷山鉄剣の銘文の解読がきっかけになって、江田船山古墳

銘文の語る歴史 —115文字の大発見—

6世紀以前の金石文としては，福岡県志賀島の金印，奈良県東大寺山古墳出土鉄剣の銘文，同県石上神宮の七支刀の銘文，熊本県江田船山古墳出土鉄刀の銘文，和歌山県隅田八幡宮の鏡の銘文などが知られていた。いずれも西日本で発見されたり伝えられたものである。

そのため東日本の古代史資料の発見が望まれていたが，1978(昭和53)年，発掘後11年たった鉄剣のさび落しの過程で，剣に刻まれ金線をはめ込んだ(金象眼)115の文字が発見された。

その鉄剣は，埼玉県行田市の稲荷山古墳(全長120mの前方後円墳)から発掘されたもので，銘文は「辛亥年七月中記」ではじまり「乎獲居臣の系譜」や「乎獲居臣が獲加多支鹵大王の斯鬼宮に仕えていること」などをしるしてあった。出土した副葬品から，辛亥年は471年で，獲加多支鹵大王は雄略天皇(倭国王武)であると考えられる。

1987年には，千葉県市原市の稲荷台1号墳(直径27.5mの円墳)から発掘された鉄剣に，「王賜」ではじまる銀象眼の12文字が確認された。この古墳は，副葬品の須恵器から5世紀中ごろの築造と推定され，鉄剣の製作時期は5世紀中ごろ以前ということになった。「王」を畿内の倭王とみるか，東国の有力首長とみるかの見解は分かれているが，これも5世紀ころの東国を研究するための貴重な資料となった。

稲荷山鉄剣の銘文の解読がきっかけとなって，1873(明治6)年に発掘された熊本県の江田船山古墳(全長61mの前方後円墳)の鉄刀の銀象眼の銘文にも，「獲□□□鹵大王」の名が見えることが確認された。

これらの銘文によって，5世紀後半の雄略朝に畿内の王権の勢力が関東地方や九州地方中部にまで及んでいたことは確実となり，倭国王武の上表文に見える状況に対応していることがわかった。 →P.20

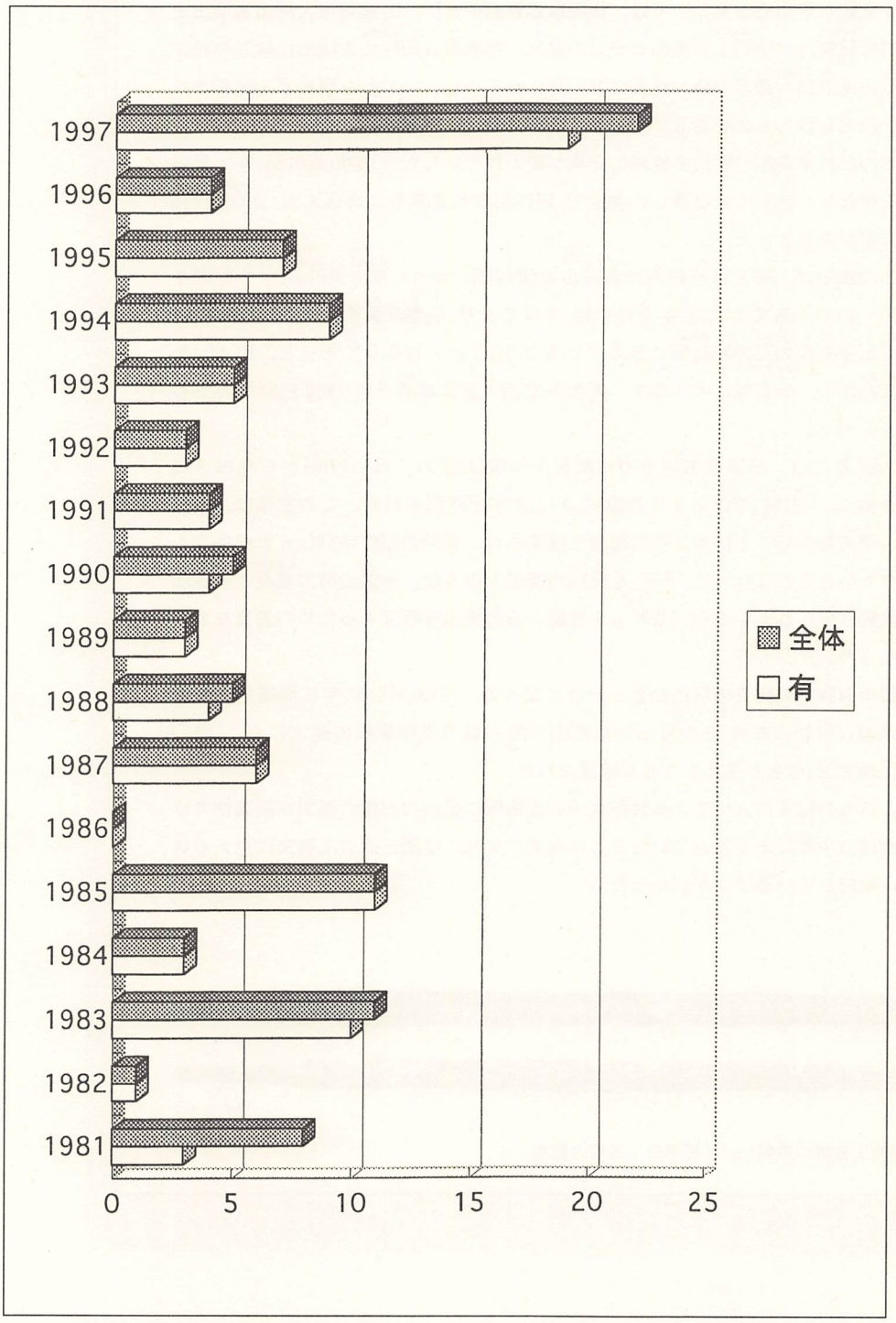
▲稲荷山古墳の鉄剣(上)と稲荷台1号墳の鉄剣(下)

第16図　別枠掲載例（高校日本史B・帝国書院）

の大刀銘文も「獲加多支鹵大王」であることが確認された。⑤これらの銘文によって、5世紀後半の雄略朝に畿内の王権の勢力が関東地方や九州地方中部まで及んでいたことは確実になり、倭王武の上表文に見える状況に対応していることがわかった（第16図）。

（4）鉄剣写真の掲載

第17図をみてもわかるように、1881年度版では8件中なか3件とその割合は少ないが、それ以降は100％に近い掲載である。また、高校日本史では隅田八幡神社蔵の銅鏡の写真もあわせて掲載

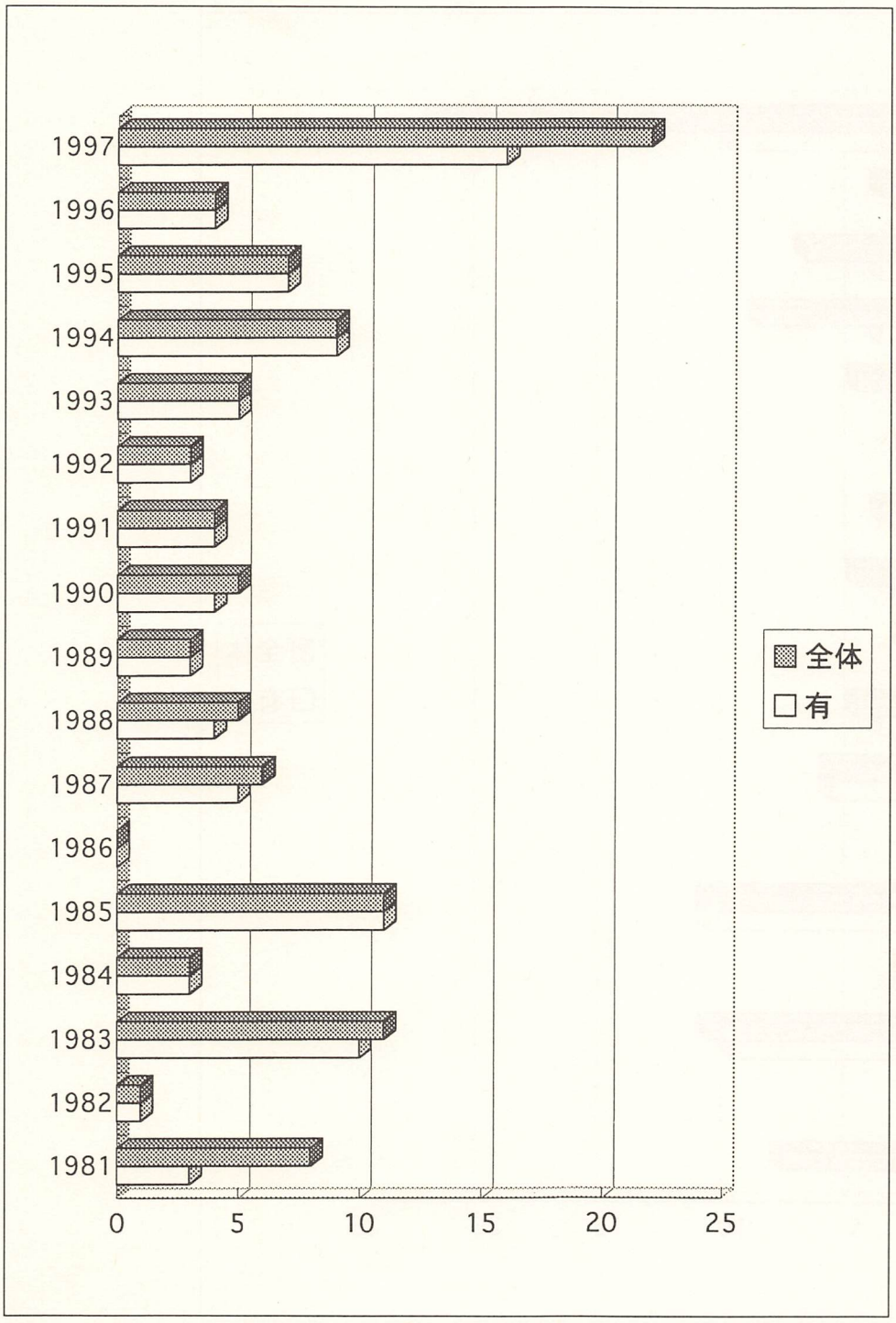


第17図　高校日本史・鉄剣写真掲載数

している教科書が大半であり、さらに江田船山古墳出土大刀の写真も掲載しているものもある。

（5）資料説明

高校日本史ではこれまでみてきたように、本文注や別枠を設けて詳細に解説しているが、その他に掲載した写真に簡単な説明を加えている。第18図のように何らかの説明を加えている。その内容は「獲加多支鹵大王」＝「雄略天皇」と考えられること、また漢字使用の最古の例であること、また注などで詳細な解説を加えていないものは、この時代には大和政権の勢力が東国から九州中部まで及んでいたという歴史的評価もつけ加えている。



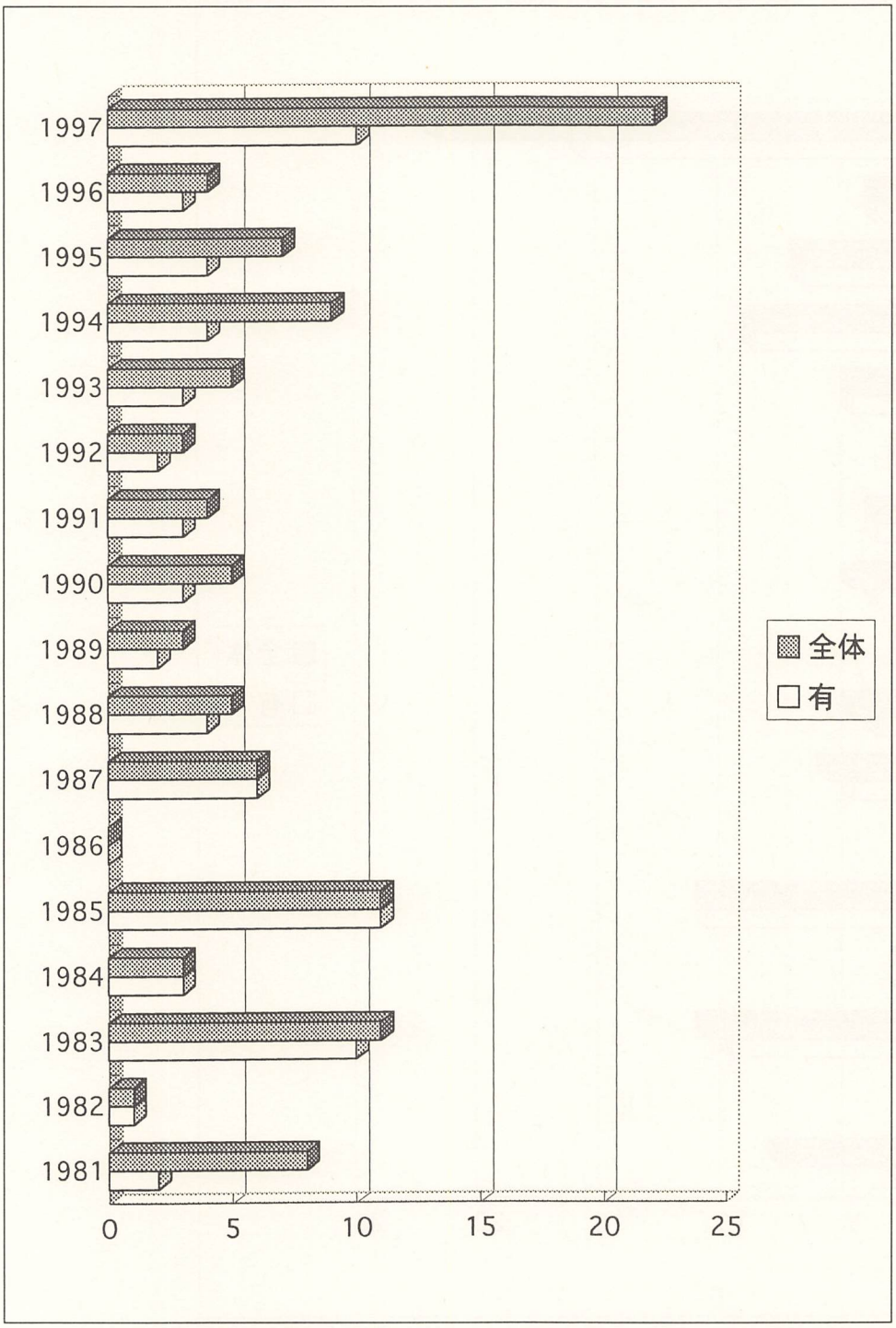
第18図　高校日本史・鉄剣資料説明数

（6）製作年代の記載

製作年代が記されている教科書は第19図のとおりである。大半のものに記されているとみてよい。ほとんどの教科書が辛亥年471年説を採用しており、2教科書が471年が有力であるが、531年説もあることを紹介している。

（7）鉄剣の扱われ方

稲荷山鉄剣は115文字という長文で、内容も豊富であることから、高校日本史では第20図に示し

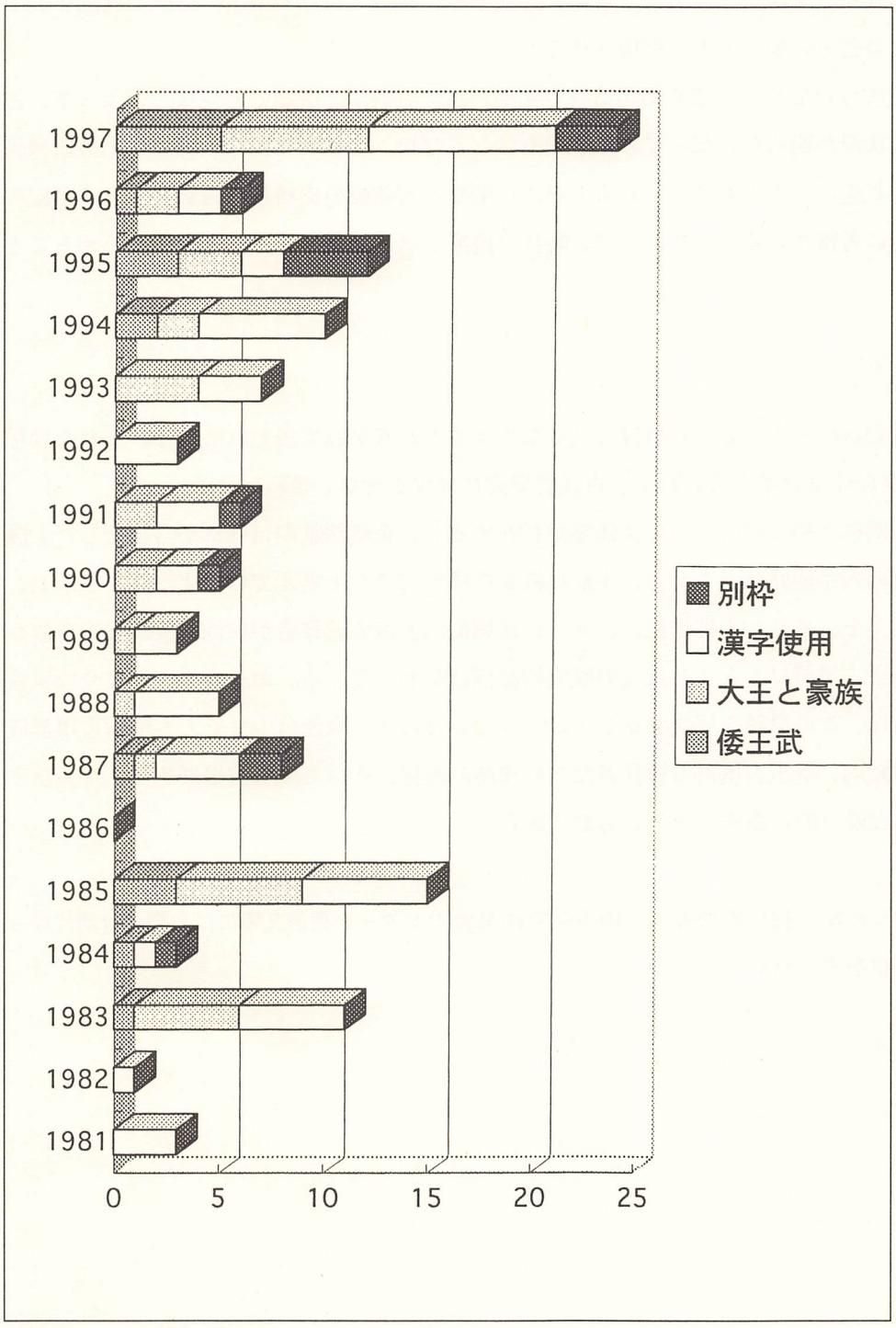


第19図　高校日本史・製作年代記載数

たように倭の五王の一人である武との関係、大王と地方豪族との関係、漢字で日本語を表記した最古の例のひとつとして、重複して説明しているようすがわかる。

（8）その他

小・中の教科書では、古墳の写真と稲荷山古墳の位置が明示された分布図が掲載されていたが、高校日本史では古墳の写真を掲載したものは、1社の教科書のみで、分布図の掲載は一切ない。



第20図　高校日本史・取り扱われ方

参　考

高等学校学習指導要領解説　地理歴史編　日本史Ｂ　平成元年12月

ア　国家の形成と大陸文化の摂取

古墳文化の特色や大陸文化の摂取と日本に渡来した人々の果たした役割などに着目して、日本における国家の形成過程を理解させる。

ここでは、古墳文化と国家の形成の過程を中心に扱う。その際、古墳文化に表れた各地における政治勢力の形成、大陸から渡来した人々による文字や各社の技術など大陸文化の伝来とその受容、大和朝廷の成立過程などを総合的に考察することを通して、日本における国家の形成と展開を、この時代の東アジアの歴史の動きの中で把握させる。

この時代の歴史については、古墳や集落遺跡の発掘、銘文を刻んだ遺物の発見などによって、古代の国家や文化の状況が明らかになってきた事例も少なくない。こうした種種の考古学上の新発見を教材として指導し生かすとともに、これらと日本に関する大陸側の史料及び古事記、日本書紀の記述などを総合的に考察させることによって、時代の概要がほぼ把握できることに気付かせることが大切である。

まとめ

以上、稲荷山鉄剣は小・中・高の教科書で大きなウェイトが置かれて扱われている。それだけ稲荷山鉄剣の115文字の銘文は第１級資料で、古代史研究には欠かせない資料いえる。

稲荷山古墳には礫槨と粘土槨の二つの主体部が存在するが、金錯銘鉄剣は礫槨から出土した。礫槨の被葬者は鉄剣の入手経路はともかく、生前に鉄剣を携えていたと考えていいようだ。しかし、鉄剣をつくらせ銘文を刻ませた乎獲居臣が、あるいは稲荷山古墳の被葬者が在地豪族か畿内豪族か否かによって、埼玉古墳群はもとより銘文の歴史的評価は変わってくる。おそらく、銘文や埼玉古墳群だけの研究では、この命題を解決することはできないだろう。今後は少なくとも埼玉古墳群成立以前の北武蔵の動向、埼玉古墳群の被葬者たちの館跡の確認、そして埼玉古墳群を支えた人びとの集落跡の確認など総合的な調査・研究が必要であろう。

なお、最後になったが、教科書調査では埼玉県立南教育センターと東書文庫には大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。